【現地報告】第一次大戦さながらの「大砲と塹壕の戦い」になったウクライナ戦争の行方

木村　正人
在英国際ジャーナリスト

ロシア軍のウクライナ侵攻は第一次世界大戦さながらの「大砲と塹壕の戦い」になっている。ウクライナへの必要な武器供与と資金援助が途絶えなければ「最短２年でロシア軍をウクライナから駆逐できる」(ウクライナ軍に参加する元米兵）との見方もある。筆者は５月末から１カ月以上、ポーランドやウクライナ各地を訪れ、戦争の実相を取材した。

「ロシア軍の砲撃は激しく、重傷者が出ている。絶対、志願するな」

ウクライナ西部リビウの国内避難民宿泊施設で会ったヨハンは東部ルハンスクの出身だ。同国第２の都市ハルキウの警察学校で学んでいたが、ロシア軍が攻めてくるとすぐにルハンスクの実家に戻った。母親は年老いた祖父母とともに実家に残った。ヨハンは父親とともにリビウに逃れてきた。母親とは毎日、携帯電話で連絡をとる。

ウクライナ西部リビウの避難民宿泊施設（筆者撮影、以下同）

東部ドンバスの第二戦線にいる兄から「ロシア軍の砲撃は激しく、重傷者が出ている。絶対、志願するな」と電話がかかってくる。両親も「行くな」と止めるが、「それでも祖国を守るために戦いたい」とヨハンは語る。ロシア軍は占領地域から古い大砲を使って不正確な砲撃を雨あられと降らせてくる。ウクライナ軍は塹壕を移動しながら反撃している。

ウクライナ兵や外国人志願兵の誰に聞いてもロシア軍の大砲（射程40～50km）は精度が低いと口をそろえる。中部クリヴィー・リフから寝台列車で首都キーウに戻った６月26日朝、キーウ中心部をロシア軍のミサイルが襲った。現場近くにロシア軍が過去何度か攻撃した旧軍施設があったが、誘導ミサイルは大砲に比べ精度が高いことがうかがえた。

しかしその数は限られている。ロシア軍は誘導ミサイルを使い尽くしつつある。軍事的というより、ドイツ南部で６月26～28日に行われた主要７カ国首脳会議（G7サミット）を揺さぶるなど政治的、心理的な効果を狙って使用している。大砲はロシア軍がウクライナ軍の10倍以上を保有しているため、米欧は誘導弾を発射できる射程の長い榴弾砲の供給を急ぐ。

ドニプロ川の川べりで日光浴を楽しむビキニ姿の女性も

家や仕事、カネを失った東部ドンバスの国内避難民の生活は悲惨だ。若者たちは元通りの暮らしを取り戻すため戦場に向かわざるを得ないのが現実だ。ロシア軍の北進を防ぐ“対ロシア要塞線”と化したクリヴィー・リフでも男は最前線でロシア軍と戦い、また領土防衛隊として街を守っていた。しかしリビウやキーウではそんな悲壮感や切迫感は全くない。

ドニプロ川の川べりで日光浴を楽しむ若者。ビキニ姿の女性も

キーウの繁華街では着飾った若いアベックが談笑し、タイヤをきしませスポーツカーを乗り回す若者もいる。気温が摂氏30度を超える週末にはドニプロ川の川べりで日光浴を楽しむ家族連れや若者でにぎわった。ビキニ姿の女性もいる。ウクライナでは戒厳令が敷かれ、原則18～60歳の男性は国外に出ることはできない。

徴兵制なのに戦争とは無縁の青年がいるのはどうしてか。ウクライナは第１陣として運用可能な予備役、対テロ作戦担当などの退役軍人を募集。第２陣は残りの予備役と2014年まで兵役に就いていた軍人や契約に基づいて兵役に就いていた人を募集した。第３陣は大学の軍事学科を卒業した予備役、徴兵対象者。第４陣は18歳から60歳までのすべての国民だ。

現在は志願兵のほか、戦闘経験のある人と第２陣の予備役が優先されている。健康に問題があるなど兵役不適格者や未成年の子どもが３人いる人、１人で子どもを育てている人、障害を持つ子どもがいる人、そして学生や教員は徴兵から免除されている。戦時中の総動員下における兵役忌避は３年から５年の禁固刑に処せられる。

「みんな前線に出払っていて、分隊長もズブの素人の民間人だ」

国連人権高等弁務官事務所（OHCHR）によると、クリミア侵攻に続く東部ドンバスの紛争で14年４月から21年12月にかけ、ウクライナ軍は4400人の死者を出した。今回のロシア軍侵攻で、４月の米紙ニューヨーク・タイムズ報道ではウクライナ軍は5500～１万1000人の犠牲を出し、大砲戦になった現在、１日100～200人が命を落としているとされる。

車イスに乗った負傷兵とみられる男性（キーウの国立がん研究所）

ウクライナの大統領顧問は英紙ガーディアンの取材に毎日150人が死亡、800人が負傷していると語っている。しかし病院は軍の管理下に置かれ、負傷しているのが兵士かどうかさえ教えてもらえなかった。キーウでウクライナ軍の新兵や民間人に銃の扱い方や砲撃した後は必ず５分おきに塹壕を移動するなどの基本を教えている元スウェーデン兵士は筆者にこう語る。

「みんな前線に出払っていて、分隊長もズブの素人の民間人だ。志願兵は18歳から65歳まで幅広く、国を守りたいという気持ちは尊重するが、太りすぎていたり年をとりすぎていたり軍隊生活に適さない人もいるのも事実だ」。ウクライナ軍が追い込まれ、18～60歳の全国民を対象に第４陣の徴兵がかけられた場合、年齢や健康状態は配慮されなくなる。

ウクライナ軍に所属して戦闘外傷救護を指導している元米陸軍兵士や現地スタッフは「もちろん愛国心から志願する若者もいるが、キーウのような金持ちの都市では、親の七光りやカネ、コネの力で兵役を回避する道楽息子もいるのは疑いようがない。ウクライナもロシアほどではないにせよ、少なからず腐敗している」と実情を解説する。しかし真相は藪の中だ。

「ウクライナは国ですらない」というプーチン氏の妄執

戦時体制下、ウクライナにとって不都合な真実が大本営から発表されることはない。イラクやアフガニスタンにも従軍した元米兵は「ロシア軍をウクライナから完全に押し出さない限り戦争は終わらない。バイデン米政権の態度はロシア軍によるキーウ近郊ブチャの残虐行為で一変した。長射程で正確な大砲を大量に供給し、それでロシア軍の補給線を叩けば２～５年で駆逐できる」と言う。

クリミア併合、東部紛争に続き、キーウ陥落を目指した侵攻は「ウクライナは国ですらない」というウラジーミル・プーチン露大統領の虚妄の執念から始まった。ロシアとの核戦争に巻き込まれたくないという恐怖心とロシア産の原油・天然ガス欲しさから、米欧はチェチェン、シリア弾圧、元ロシア情報機関員毒殺、クリミア併合、東部紛争介入、民間機撃墜に見て見ぬふりをしてきたのが実情である。

欧州連合（EU）の中にはウクライナを軍事・経済両面で支援しすぎて戦争が長期化すれば、ロシア産石炭・原油に対する制裁がいずれブーメランとなって自らの経済を傷つけると露骨に主張するハンガリーのよ

うな国もある。ウクライナに領土の一部をあきらめてロシアと停戦するよう促す動きもある。

フランスのエマニュエル・マクロン大統領は「戦いが止まった日には外交を通じて出口が築けるよう私たちはロシアに屈辱を与えてはならない」「仲介者になるのがフランスの役割だと確信している」と述べ、顰蹙を買った。しかしEU主要国が本音では停戦を優先しているのは紛れもない事実なのだ。だから戦争は泥沼化したまま固定されるとの見方も根強い。

英首相「エネルギー、食糧価格の高騰で何百万人もの人が飢餓の危機に瀕している」

欧州の中ではポーランド、バルト三国と並んで、英国がウクライナ支援を強く打ち出している。EUを離脱した英国は、EU主要国ドイツ、フランス、イタリアなどとは一線を画している。プーチン氏との対決姿勢を鮮明にしているボリス・ジョンソン英首相はG7サミットでこう力説した。

「ウクライナにおけるプーチン氏の行動は世界中に恐ろしい波紋を広げ、エネルギーや食糧の価格を上昇させ、何百万人もの人が飢餓の危機に瀕している。世界のリーダーは一丸となって経済的・政治的な力を結集し、ウクライナを助け、世界中の家庭が暮らしやすくなるようにする必要がある。ロシアへの制裁とウクライナへの支援を少しでも緩めてはならない」

ウクライナ軍はロシア軍が占領していた黒海西部のズミイヌイ（蛇）島を奪還したと発表し、ロシア側もこれを認めた。ロシア軍はズミイヌイ島を拠点に海上封鎖を強行し、ウクライナが黒海経由で南西部の港湾都市オデーサなどから穀物を輸出するのを妨げてきた。農場や倉庫も攻撃し、ウクライナ経済を完全に麻痺させようとしている。

「欧州の穀倉地帯」ウクライナは世界の小麦の10%、トウモロコシの12～17%、ヒマワリ油の半分を供給する。途上国の年間消費量に相当する2500万トンのトウモロコシと小麦を輸出できず、サイロで腐る危機にさらされている。７月に穀物が収穫されると、この問題はさらに悪化する。世界中の4700万人が食糧危機の瀬戸際に立たされているのだ。

時計の針をどこまで逆戻りさせるのか

ウクライナは穀物輸出の96％を黒海に依存してきた。ズミイヌイ島を奪還したのもロシア軍の海上封鎖を崩すためだ。ルーマニアやブルガリアまでウクライナの穀物を陸路で運び、黒海経由で輸出できるようインフラ整備が進められている。G7の首脳はウクライナの黒海の港からの農産物の自由な通航を可能にすることをロシア側に対して求めた。

時計の針をロシア軍がウクライナへの侵攻を開始した今年２月24日以前に戻して満足するのか、それとも2014年のクリミア侵攻以前にまで逆戻しするのか。この戦争はウクライナ１国では戦えない。ロシア軍の実力が白日の下にさらされた今、米欧がプーチン氏の核の威嚇に屈せず、どこまでウクライナを支援できるかに戦争の帰趨はかかっている。

ヤヌコビッチ元大統領が愛人と暮らしていた「腐敗の館」

14年２月に失脚し、ロシアに逃亡したビクトル・ヤヌコビッチ元大統領が愛人と暮らしていた「腐敗の館」を訪れた。キーウ中心部から地下鉄と小型バスを乗り継いで２時間近くかかった。ヤヌコビッチ氏はEUとの「連合協定」署名を見送ってロシアとの関係を強化する道を選択肢し、市民の憤激を買って「マイダン革命」に火を放った。

ウクライナ市民がロシアと袂を分かち、自由と民主主義を掲げるEUへの道を選択したことがウクライナ戦争の発端だ。プーチン氏の“ウクライナ支配人”ヤヌコビッチ氏の大邸宅の中は「彼が逃亡するまで、誰も知らなかった」と案内役のジュリアは語る。当時、ドニプロ川を堰き止めた人工湖「キーウ海」や空からも大邸宅には近づけなかったという。

東京ドームの約30倍の広さの大邸宅

大邸宅は現在、国有化され、一般公開されている。ロシア軍は一時、２つ向こうの村まで進撃してきた。塀に囲まれた約140ヘクタールの敷地にはゴルフコースやテニスコート、ヘリポート、サマーハウス、ダチョウのいるエキゾチックな庭園、プライベート動物園、

クラシックカーが並ぶガレージがあり、レストランに改造された実物大の船まで浮かんでいる。

東京ドームの約30倍の広さ。もともと修道院だったが、1991年のウクライナ独立後は国の娯楽施設になり、ヤヌコビッチ氏が02年以降、私物化して大金をかけ愛人と暮らす大邸宅に改装した。妻が暮らす小さな首相公邸の存在だけが市民に公開されていたとジュリアさんは言う。高価な絵画や彫刻、調度品は３日がかりでヤヌコビッチ氏がすべて持ち去った。

大邸宅内に設けられたウクライナ正教の礼拝所

大邸宅の螺旋階段（筆者撮影）

５階建ての大邸宅にはウクライナ正教の礼拝所まである。自分や家族を模したアイコンのモザイク壁画があしらわれ、琥珀（こはく）が散りばめられている。目が眩むような豪華さだ。ヤヌコビッチ氏は自らを神か、現代の皇帝と勘違いしていたに違いない。愛人の部屋のトイレには金メッキが施されたゴミ箱まで置かれていた。

米FOXニュースは15年当時、その価値を7500万ドルと報じている。ウクライナでは新興財閥（オリガルヒ）が政治と癒着し、裁判官や検察官の資格試験、大学の単位までカネ次第と言われてきた。腐敗体質はウォロディミル・ゼレンスキー大統領になっても一掃されたわけではない。プーチン氏と妥協するということはこうした腐敗を受け入れることだ。

ウクライナと「連合協定」を進め、戦争のきっかけを作ったEUには「マイダン革命」を完遂させる重大な責任がある。マクロン氏がほのめかしているようなプーチン氏との安易な妥協は許されない。それはプーチン氏とロシアにウクライナ侵攻の態勢を整える時間を与えるだけだ。ウクライナ戦争は自由と民主主義という米欧の価値と、中露の権威主義が真正面からぶつかる文字通りの「代理戦争」なのだから。

（７月１日執筆）